

# アジアの民間信仰と文化交渉

二階堂善弘著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】

---

---

# 目 次

前 言	1
-----	---

## 第一部 日本の寺院における渡来神と文化交渉

第一章 日中の五山における伽藍神と文化交渉	7
第二章 黄檗の伽藍神と文化交渉	75
第三章 妙見神と真武神における文化交渉	117
第四章 日中の地藏菩薩の差異と文化交渉	133

## 第二部 アジアにおける神々の往来と文化交渉

第一章 台湾・シンガポールの閩粵系諸廟と文化交渉	165
第二章 長崎・沖縄の渡来神と文化交渉	213

結 語	241
-----	-----

後 記	243
-----	-----

---

---

## 前 言

本書は、文化交渉学的手法によって、幾つかの華人系の廟及び祭神を論じたものである。分析の対象となるものは、幾つかの道教・仏教・民間信仰の神々や菩薩などであるが、ほぼすべてが大陸中国以外に伝わって祀られたか、或いは他地域から伝来し変容していったものに限られる。

第一部「日本の寺院における渡来神と文化交渉」では、日本に伝来した神仏を中心に考察を行った。

第一章の「日中の五山における伽藍神と文化交渉」で対象とした招宝しょうぼう七郎しちろう・祠山しぜん張ちやう大帝たいていなどの伽藍神がらんじんは、鎌倉時代に南宋から伝来し、その後日本の五山寺院に祀られたものである。これらの神々は、その後中国ではかえって信仰が衰亡してしまった。

第二章の「黄檗の伽藍神と文化交渉」で取りあげた華光かこう大帝は、江戸時代初期おうぼくに黄檗宗と共に日本に伝来したものである。その後日本の各地で神像が作られたが、その由来が忘れられることになってしまった。また中国においても華光は清代には信仰が衰えていった。

第三章「妙見神と真武神における文化交渉」では、古代の玄武から変化した道教の真武しんぶ大帝が、日本において妙見菩薩と混淆されて信仰される状況について分析した。

第四章「日中の地藏菩薩の差異と文化交渉」においては、地藏菩薩が日本と中国でかなり異なったイメージをもって祭祀される状況について分析を行った。さらに現在中国の地藏信仰の中心となっている九華山の現状について報告した。

第二部「アジアにおける神々の往来と文化交渉」においては、中華圏の神々が中国大陸以外の地域に伝播し、アジアの各地で祭祀されることになった状況について論じた。

第一章「台湾・シンガポールの閩粵系諸廟と文化交渉」では、現在における台湾・シンガポールの廟の状況に基づいて、そこで祭祀される神々の源流

である閩粵<sup>びんえつ</sup>地域の状況も含めて考察した。取りあげたのは、保生大帝・開漳<sup>しょうせいおう こうたくそんのう</sup>聖王・広沢尊王などの神である。

第二章「長崎・沖縄の渡来神と文化交渉」では、長崎の唐寺や那覇の至聖廟などの現在も残る華人系の廟について分析を行った。

これらの神々については、これまでもむろん研究の蓄積はあった。本書はこれまでの様々な研究を踏まえて書かれたものである。しかし、文化交渉学の視点をを用いることで、より一層の研究の深化が成し遂げられたと考えられる。

例えば、第一部第一章で対象とした招宝七郎神がある。この神は宋から元にかけて浙江地域において盛んに祀られ、鎌倉期に五山文化と共に日本に伝来した。その後中国においては信仰が衰えていき、現在ではほとんど廟で祭祀が見られないものになってしまった。そのため、道教や民間信仰の分野では研究されることはなかった。研究がなされたのは、日本の禅宗研究、或いは美術史研究、さらに日中交流史においてであった。また招宝七郎神についての文献資料は、中国の通俗文学に記載があり、それを踏まえて中国文学の分野からの指摘もあった。いずれにせよ、複数の分野で個別に研究がなされていたものである。このような性格を持つ招宝七郎神について分析を行うには、幾つかの研究分野をまたがった文化交渉学の視点が必要であると考ええる。

筆者個人としては、文化交渉学の特色は文献資料研究と現地調査の複合的な性格を持つものであると考えている。再び招宝七郎の例を取りあげるが、招宝七郎については、文献資料がほとんど存在しないという問題がある。残っているのは、日本の禅宗寺院に残された像、それに中国の寺廟に残存する痕跡のみである。また時には寺院の僧侶ですら像と招宝七郎神と認識していない場合があった。そのため、筆者は実際にこれらの寺院を訪ね、その像を確認する必要があったのである。幸いにも寧波<sup>にんぼう</sup>の阿育王寺<sup>あいくおうじ</sup>には招宝七郎の像がちゃんと残っていた。もっともこれは誤って阿育王の像と認識されていたものであった。このように、現地調査と文献資料をマッチさせることが、文化交渉学の重要な手法の一つであると考ええる。

さらに、筆者個人は文化交渉学には電子ツールの活用が欠かせないと感じ

ている。先にも書いた通り、文化交渉学は分野横断的な調査が必要になるが、対象とする分野が多岐にわたれば、おのずから扱う文献の量も膨大になる。また、自分の専門領域以外の文献を博捜することは、なかなか難しい作業である。この欠を補うには、短時間で大量の文献を検索可能な電子ツールの活用が必要となるのである。またも招宝七郎の例であるが、宋代の文人の文集に記載があることが関西大学所蔵の『中国基本古籍庫』を検索することによって判明した。これは電子ツールを使用しなければ、発見すること自体不可能であったろう。むろん、単純に検索するだけの活用では、問題が生ずることは明らかであるので、当然ながら注意が必要である。本書の考察においては、電子ツールの利用が不可欠であり、各所で電子ツールによる検索の提示を行っている。